

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 10 月 26 日現在

機関番号：27501

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2014

課題番号：24659964

研究課題名(和文)外国人患者に対する態度形成要因の日韓比較を基にした多文化看護研修プログラムの開発

研究課題名(英文) Factors affecting attitude of Japanese nurses caring for culturally and linguistically diverse patients

研究代表者

桑野 紀子 (Kuwano, Noriko)

大分県立看護科学大学・看護学部・講師

研究者番号：30550925

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、日本の看護職を対象とし、文化的背景や言語が多様な外国人患者の看護についてインタビュー調査及び質問紙調査を行った。結果、日本の看護職は外国人患者を看護する際、日本人患者を看護する際に比べ、看護職としての自律性が発揮できていないと認識していた。看護専門職の自律性には Intercultural sensitivity が最も大きく影響し、通訳の充実度も影響していた。今後増加すると予測される外国人患者に対し、日本の看護職が日本人患者同様に質の高い看護を提供するためには、Intercultural sensitivity 向上のための教育等取り組みと施設レベルでの通訳サービスの充実が重要である。

研究成果の概要(英文)：This study identified that the autonomy of Japanese nurses when caring for patients with culturally and linguistically diverse needs to be strengthened in order to promote the highest quality of care. Intercultural sensitivity was the most influential factor in explaining autonomy, meanwhile, the autonomy was highly associated with the usability of the interpretation service. Increasing awareness and respecting cultural diversity by offering transcultural nursing education through hospitals and school are crucial elements for improving intercultural sensitivity. In addition, the effective communication is essential for the autonomy of Japanese nurses in caring for non-Japanese patient. Implementation of interpretation services at the organizational level would improve the nurses' resources for effective communication which can lead to increase the autonomy and the ability to provide culturally competent care.

研究分野：国際看護学

キーワード：多文化看護 外国人患者 在留外国人 文化に対する感受性 医療通訳サービス

1. 研究開始当初の背景

(1) 2010 年度の日本滞在外国人登録者数は 2,134,151 人(日本人口の約 1.67%)であり、この 20 年間に急速に増加した(法務局入国管理局 2011.6.17 公表資料)。日本滞在外国人登録者数は 1990 年の出入国管理および難民認定法(入管難民法)改正、政府の留学生・外国人観光客受入勧奨、外国人労働力の積極的導入などにより増加傾向が顕著である。外国人労働力について見ると、外国人雇用状況は 2010 年 10 月末で 649,982 人と前年より 15.5%増加している(厚労省労働経済白書平成 23 年度版)。高齢化が加速し、製造業や医療・福祉分野におけるマンパワー確保が喫緊の課題となる中で、外国人労働者は今後も増加し続けると予測される。

アメリカなどの多民族国家とは異なり、ながく単一民族的な国家として存在してきた日本であるが、職場や教育現場等あらゆる場面で異文化との「共生」が求められる時代が到来している。こうした状況下、医療の現場でも看護職が外国人患者をケアする機会が増加しているが、医療現場では、ただ言葉の問題だけでなく、文化・風習の相違によりケアが困難なことが報告されている。

(2) 新しい「共生」社会をつくっていくためには、医療現場においても、看護職ら医療従事者が文化に対する感受性を高めていくことが必要であろう。

また、医療現場における外国人患者の受け入れは経済成長のための重点項目としても注目されており、2012 年 2 月、厚労省は経済成長に特に貢献度が高いと考えられる施策として国際医療交流(外国人患者の受け入れ)を位置づけ、「外国人患者受け入れ医療機関認証制度整備のための支援事業(実施団体の公募)」を開始している。

2. 研究の目的

本研究では、日本に滞在する外国人患者に対する看護に焦点をあて、日本の看護職の外国人患者看護の現状および課題を明らかにする。また、文化的背景や使用言語が多様な患者に対して、日本の看護職が日本人患者への看護と同様の、質の高い看護を提供するために必要な対策について検討する。とくに、本研究結果を外国人患者看護の研修プログラム開発のための資料として活用する。

3. 研究の方法

(1) 文献調査・情報収集

文献及びインターネット等によるデータを元に、日本・韓国・アメリカ等における外国人への医療体制、保健医療に関する社会資源、看護師への多文化看護教育等について現状をまとめ、アップデートな情報を収集した。

(2) 日韓の看護職へのインタビュー調査

外国人患者の看護に対する認識について、日韓の看護職を対象とし、面接ガイドを用いた半構造的面接調査を行った。

調査期間は 2012 年 10 月～2013 年 3 月であった。対象施設は日韓国 3 施設(内科・外科病棟を有する総合病院)であり、対象者は、対象施設に 1 年以上継続勤務し、過去 1 年間に 1 名以上の外国人対象者ケア経験を有する看護職者であった。日本 9 名、韓国 6 名の看護職者にインタビューを行った。

インタビュー内容は、「属性」「外国人患者をケアした際の状況及びその時感じたこと」「今後外国人対象者をケアするに際しての考え」「外国人対象者のケアに関し学んだ経験」であった。

分析方法は、録音した面接内容と面接記録を逐語録にし、データをカテゴリ化し、テーマ分析(Thematic analysis)を行った。テーマ分析の方法は、Braun, V., & Clarke, V. (2006)を用いた。

韓国との比較を通し、日本の看護職の特徴をより明確化できるよう試みた。

(3) 日本の看護職への質問紙調査

(1)及び(2)の結果をもとに質問紙を作成し、日本全国の看護職を対象とした質問紙調査を行った。調査期間は2013年7月～9月末日であった。日本国内の138施設に調査協力を依頼し、27施設から承諾を得た(調査協力を依頼した施設は、a. 「外国人患者受入れ医療機関認証制度」認証病院、b. 「国際医療機能評価」認証病院、c. 国際外来・診療通訳支援等外国人向け窓口を設置している総合病院、地方公共団体や外国人支援団体HP等で紹介され外国人が来院する総合病院であった。尚、c.はインターネット、病院HP、県・市町HP、外国人支援団体HP等から情報収集した)。対象者は、対象施設に勤務し、外国人患者看護経験がある臨床経験1年以上の看護職者380名であった。

質問紙では、属性と併せて、異文化体験の有無、外国人患者の看護についての学習機会の有無、勤務施設の医療通訳サービスの有無などについて質問した。また、質問紙の一部として、看護の専門職的自律性尺度(菊池1996)、Intercultural sensitivity scale (Chen & Starosta 2000)を活用した。Intercultural Sensitivityとは、「文化の違いを尊重し、異文化を理解するポジティブな感情を喚起し、それにより、適切でよりよい多文化間コミュニケーションを促進できる個人の能力」とされている(Chen & Starosta 2000)。

データ分析にはSPSS20.0J for Windowsを使用した。対象者の属性・異文化体験の有無・外国人患者の看護についての学習機会の有無・勤務施設の医療通訳サービスの有無等と看護専門職の自律性との関連(相関)ま

た、看護専門職の自律性について、日本人患者を看護する場合と外国人患者を看護する場合の比較等を行った。さらに、看護専門職の自律性と属性との関連や、自律性への影響要因について調べた。

4. 研究成果

(1) 3.- (2) インタビュー調査について

外国人患者の看護について、日韓の看護職を対象として行ったインタビュー調査では、「外国人患者の看護における困難」「外国人患者の看護において重要なこと」「外国人患者看護についての教育の不足」の3つのテーマ、および各テーマの下位カテゴリが抽出された。

困難に感じる点については、言葉の壁、文化的背景の違い等、両国の看護職に多くの類似点が確認され、また、結果は先行研究と同様の内容を多く含んでいた。「外国人患者の看護において重要なこと」では、下位カテゴリとして、オープンマインドであること、ステレオタイプの払拭、コミュニケーションスキルの向上、看護職者の多文化に対する理解や配慮の重要性が強調された。また、日本の看護職からは「(外国人患者に対しても)自分のもつ看護力を発揮することが重要」という意見が挙げられ、外国人患者の看護では様々なバリアにより普段の自律的看護を実践できていない可能性が示唆された。「外国人患者看護についての教育の不足」については、両国の看護職が言及し、教育の必要性が示唆された。

(2) 3.- (3) 質問紙調査について

日本国内27施設、計256名から回答を得(回収率67.4%)、完全回答の238名を分析対象とした。

結果、日本の看護職は、外国人患者を看護する際、日本人患者を看護する際に比べ、看護職としての自律性が発揮できていないと

認識していることが明らかとなった。
Intercultural sensitivity (文化に対する感受性)、医療通訳サービス、経験年数等が自律性への影響要因であり、外国人患者に対しても日本の看護職が自律的に看護を提供するためには、Intercultural sensitivityの向上及び医療通訳サービス充実の必要性が示された。今後、看護職養成課程や継続教育において、看護職の Intercultural sensitivity の向上につながるような内容を取り入れることを検討する必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計1件)

Noriko Kuwano, Hiromi Fukuda, Sachiyo Murashima. (2015). Factors Affecting Professional Autonomy of Japanese Nurses Caring for Culturally and Linguistically Diverse Patients in a Hospital Setting in Japan. The Journal of Transcultural Nursing. 1-7. (発刊2016年) 電子版発行済 (2015/5/21)
DOI: 10.1177/1043659615587588

[学会発表](計1件)

Noriko Kuwano. Health status of foreign workers and health care support system in Japan. International Nursing Conference 2012, Globalization and Nursing Education. 2016, 11. Seoul (Korea). (招待講演)

[図書](計0件)

[産業財産権]

出願状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

国内外の別:

取得状況(計 件)

名称:

発明者:

権利者:

種類:

番号:

出願年月日:

取得年月日:

国内外の別:

[その他]

ホームページ等

6. 研究組織

(1)研究代表者

桑野 紀子 (Kuwano Noriko)

大分県立看護科学大学 看護学部 講師

研究者番号: 30550925

(2)研究分担者

李 笑雨 (Lee So Woo)

大分県立看護科学大学 看護学部 教授

研究者番号: 50448825

(3)連携研究者